
春風のメロディー

石川 乃牡硫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春風のメロデー

【Nコード】

N0700I

【作者名】

石川 乃牡硫

【あらすじ】

音大3年生の青年の人生をつづったストーリー。音楽を通じて大切な人に会う。そんな恋愛系のストーリーです。

第一話：不意の出会い

風…。風が吹いている。

草のにおい。土のにおい。日のにおい。

いろんなものを運んでくれる。

『キーンコーンカーンコーン。』

「うん？」

『ガバ！』

「そうだ、授業だった！」

ようやく目が覚めたとき、それは授業の始まるチャイムの音でだった。

私は音大に通っている3年生だ。

大学なので授業は単位が取れば別に休んでもよかった。

しかし私は学校に通うのがめんどくさくてあと一日も休めない。

もし休んだら留年である。

私は音楽なんて高校まで興味が無かった。

高校に入り、友達の強い勧めで軽音楽部に入った。

なんとなく好きな曲を練習し、好きな曲を演奏した。

高校の3年間は他の人が好きな曲を、…今売れている流行の曲をエ

レキギターで弾いていた。

なんとなく自分の意思で歌ってない感じだった。

そんなこんなで大学に入った。

高校3年生での時点では特に目的が見つからなかったので、音大に行こうと思った。

ギターの腕はそんなに上手くなかった。

そしてなんとなく音大に入った。

音大では高校と違って何もかも変わればと思っていた。
しかし生き方なんてそんなにコロコロ変わるもんじゃない。
結局、音大の3年生になっても大して変化がなかった。

音大の勉強は好きだった。

自分が楽しいと思える曲を作るための過程だからだ。
でもそれも2年もすれば飽きてくる。

3年生で単位がギリギリというのもそのせいでだ。

そんなある日の事である。

自分の好きな曲を鼻歌で歌いながら教室の外を歩いていた時の事だ。
「フンフンフーン」

と、不意に

「あ、その曲、レシピエンドの『音のかけらを集めて。』よね、私も好き！」

と、急に見ず知らずの異性に声をかけられた。

「そうだけど。」

と、私はぶっきらぼうに言った。というか鼻歌を聴かれて正直恥ずかしかったからだ。

「あ、ごめん！急に話しかけて。」とその子。

「いや、いいよ。」と私。

それがその人との初めての出会いだった。

第二話：鼻歌での引き合い

数日後の昼食後、学校近くの公園でのんびりしていた。空を見ながら何気なく鼻歌を歌っていた。

すると突然「また同じ歌を歌ってる（笑）」と。

声の方向に目線移すと、この間の女性がいた。

「こんにちは。」と、その女性は声をかけてきた。

「あ、ども。」と私。

「隣、いい？」とその女性。

「え？え？！…あ、いいですけど…。」と困惑気味の私。

「その曲、よつぽど好きなんです（笑）。」

「あ、はい。」

「私は千夏^{ちなつ}。あなたは？」

「冬真^{ふゆまこと}。」

と、なぜか普通に自己紹介。

彼女の雰囲気がそうさせてしまうのか。不思議だ。

「その曲は…確か3年前くらい前の曲ですね。」と彼女。

「よく知ってるね。あんまり売れてなかったけど。」と私。

「ええ。私、その曲、とっても好きでした。」

「俺は高3のバンドで歌ってたんだ。」

「え？ホント？」

「ああ。俺以外のバンドメンバーは一人としてやりたいってやつはいなかった。」

「へー。良い曲なのに。」

そうして切れ間無く10分ぐらい喋っただろうか。

私は妙な高揚感を感じていた。

そして会話がふと切れた。

私は横になり空を見た。そして言った。

「空って綺麗だね。」

「うん。」

「君も寝ころがって見てみなよ。」

「うん。」

青い空、白い雲。うーん曲になるなとか考えていると、

「私、つらい事があったんだ…。」

といきなり彼女が言った。

「え？」

「それでまたあなたがいて、この間のように歌ってて。それで声かけたの。」

「あ、そうなんだ。」と私。

「…話せるのなら何があったか聞かせてくれないかい？」

「…おばあちゃんがね。昨日亡くなったの。私おばあちゃんっ子で今日は休もうと思っていたけど元氣が出ればなと思って学校来たの。そしたらあなたの歌が聴こえて…。」

「そうなんだ…。」

なんか急にその人の心を支えたいと思った。

そしてしばしの沈黙。

「…少しは元氣出たかな？」

「うん。すごく。ありがとう。」

『キーンコーンカーンコーン』とチャイム。

「あ、いつけない。次、授業だった。私行くね。」

「うん。わかった。」

そうして彼女と別れた。

その日はそのことで頭がいっぱいだった。

第三話：彼女ができる

それからしばらくはその人と会わなかった。
その事も頭から薄れていつていた。

そしてとある休日の事である。

街中をぶらぶらしていると、ぱったりその人と会った。

「あ、久しぶり。」と彼女。

「あ、おひさ。その後はどうだい？」と私。

「うん。元気になった。」

「そうか。よかった。」と心から思った。

そしてしばしの沈黙。

「ねえ、デートしよ。」といきなり彼女が言った。

「え？えー?!」ときよどる私。

「その喫茶店。久しぶりに話でもしようよ。」

「あ、お茶ね。いいよ。」

そうしてサテンに入った。

「何頼む？」と彼女。

「俺はエスプレッソで良いや。君は？」

「私は千夏。もう忘れたの？」

「千夏さん…だね。」

「千夏でいいよ。」

「え？それってなんかラフすぎやしない？」

「だって昨日今日あった仲じゃないんだから。呼び捨てでいいよ。」

「わかった。んじゃ千夏は何頼む？」

「私はショートケーキとアメリカン。」

そうして注文をして席で待つ。

「千夏はあの大学の…ピアノ科？」

「うんそうよ。よくわかったわね。」

「いや、ただなんとなく。」

「冬真さんてすごく感じがいいね。」

「さんはいらないよ。」

「え？」

「自分の時だけさんを付けて。他人行儀過ぎるよ。」

「…そ、だよな。んじゃ君付けで良い？」

「そだね。その方がこしょばくない。」

などと軽い自己紹介をしていると注文が来た。

「ここのサテン、良く来るの？」と俺。

「うん。週一回は来てるよ。」と彼女。

「へー。」

と、水を飲む。

「冬真君は何科なの？」

「現代音楽科。ボーカルとギターやってる。」

「へー。ギター弾けるんだー。すごい。」

「何もすくくないよ。俺ぐらいのレベルなら五万といるよ。」

「いやいや、私的にすごいんだー。」

「千夏はピアノが出来るじゃん。」

「ピアノの方が簡単だよ。」

「じゃお互いすごいって事で（笑）。」

「そだね（笑）。すごいすごい。」

2人笑った。

そうこう話をしていると注文が来た。

エスプレッソを飲んでみる。

「…おいしい。こんなに香りの高いエスプレッソは初めてだ…。」

「あれ？この喫茶店に来たのは初めてなの？」千夏が聞いた。

「うん、初めて。…いやおいしい（笑）。」

「そう（笑）。よかった。実はケーキも美味しいんだよ、ここ。」

「うん？え、あ、甘いのが苦手なんだ。俺。このエスプレッソも砂糖入れてないし。」

「そうなんだ。残念。でもブラックコーヒー好きだなんて大人だね。」

「そうかな？」と照れ笑い。

「うん、大人大人。」

なんだろうこの幸福感は。いつまでも続いてほしいようなそんな時間だった。

余韻に浸りながらしばしの静寂。

「ねえ、私と付き合わない？」

「…え？えー?!」

突拍子もない事を言う人だ。

私はどうしていいかわからなくなった。

「付き合おうよ。」とまた彼女が言った。

「え？何回かしか会ってないし。…それに俺なんかでいいの？」

「あなただからよ。」

少しの間、彼女の目を見してみる。

そして揺るがない意志の強さが見てわかった。

「…わかった、付き合おう。というか、お願いします（笑）。」

「ぷ（笑）。冬真君って何でも笑いに変えてくれるね。嬉しいよ。」

「そ…かな？」と2人笑いあった。

その日の夜は初めて幸せすぎて眠れないという夜になった。

第四話：小杉登場！（ケインかw）

朝起きてどんな夢を見ていたのか考える。

何か幸せな事：と考えていると付き合い始めたということを思い出す。

季節は秋。

木の葉が楽しい音を奏でる季節。

ようやく現れた変化に心ときめき、始まりを告げる予感がした。

いつもの通学路。

大学なので私服で、行く時間もばらばらの中、めずらしく友達を発見した。

「よ！小杉！今日も濃いな！」

「お？おはよ（笑）。お前はいつもテンション高いな。」

大学では特に仲の良い友達は5人ぐらいいる。全員男だ。

「良い話聞かせてやるよ。」と俺。

「ん？何だ？言ってみ。」

「実は俺、彼女ができたんだ。」と浮かれ気分で言った。

「マジか！本当か？お前なんかに…。」

「それは俺に失礼だろ（笑）。」と何気に突っ込み。

「お前はそういった嘘を付かないもんな。ほー。」

「さすが、わかってんジャン。」

「今度紹介すれよ。」

「ああ、いいぜ。」と俺。

「…にしてもお前がな…。」

「しつこいって！」といつも通りのボケと突っ込み合戦突入。

めんどくさいのでそれ以降の会話ははぶくが、学校まで出会えばいつもそんな感じだった。

自分の中の良い友達は一人として誰も彼女がいない。

なのでちよつとした優越感に浸ったのだった。

付き合い始めてまもなくそれがきっかけで曲を作るようになった。それはくさいラブソングだ。

曲作りはその前もしていたが本気で曲を作りたいと思ったことは無かった。

大学でのバンドのメンバーに『初めてのラブソング』というオリジナルソングを発表した。

それがバンドメンバーの中で大うけ。賞賛された。

そしてそれが人伝いで広がり、ついにはライブのトリをその曲でと任された。

そしてライブ当日、彼女を誘った。

自分がエレキギター兼ボーカル、大学のライブでは初めてのボーカル。

自分色に染まっていくライブ会場が印象的だった。

ライブは大成功。

彼女は泣きながらライブが終わると同時にステージに上がり抱きついてきた。

そうして夢のようなライブが終わったのだった。

そしてそれは伝説となった。

第五話：自暴自棄

そのライブを皮切りにその曲だけライブで歌う日々が続いた。お金はいっぱい貰ったが、何かを失った、そんな感じだった。自分の求めているものはそんなんじゃない、そう思えてきた。だから一ヶ月でライブは一切出なくなった。

それからだ。俺が笑わなくなったのは。

彼女がライブをしなくなった俺を見て「前はこんなじゃなかったのに…。」と言った。

それはギスギスした関係になってからの一言だ。

俺はハツとした。

そして思った。…もっと新しいラブソングを作らないとこの恋は終わってしまう…と。

そんな最中、学校は留年が決定した。

彼女の一言で自暴自棄になり、学校を数日休んだからだ。

私はそれでもいいと思ってた。

それからは学校にも行かずにラブソングを作るだけの時間が多くなつた。

大学は来年から頑張ればいい、そう思ってた。

新しいラブソングを作ってはバンドで歌い、その繰り返しの日々が続いた。

彼女は2、3曲目の時は喜んでくれたが、10曲目ぐらい作ったりから彼女は私の曲を聴いても笑わなくなった。

私は曲を作る事自体が嫌になった。

何をすればいいのかすら解らなくなった。

しばらくして小杉が遊びに来た。

俺はいつものテンションを装い「多杉だよ。お前。」とギャグった。そして久しぶりに2人で喋った。

「何、最近学校休んでんの？」と小杉。

「ああ、留年決定したからな。今は目標が無いんだ。」と俺。

「そうだと思ったよ。お前、あの曲の前も授業休みまくってたからな。」

「まあね。自業自得だろうな。」

そうして学校での話や小杉の濃い話で少し盛り上がった。

そして小杉は帰り際、玄関で「引越でもしてみたら？」といきなり言った。

「引越し？なんで？」

「お前、こんな狭い部屋の中で一人きりなんて今後心がもたないぞ。」

私はしばらく考えた。

そして「…そう…だな。」と言った。

「飯もろくに食べてないんだろ？下宿にすれよ。食事付きの。」

「そういえば1日1食の時もあったな…。」

最後に「少し気分転換しろよ。」とアドバイスを貰った。

そうして小杉が帰っていった。

それから数日間、悶々と色んな事を考えた。

そして下宿に引越すと親に伝えた。

第六話：転換期

引越しの日、小杉も手伝いに来てくれた。

久しぶりの運動に楽しさすら覚え、外の空気に感動した。

小杉は『ようやく引越したか』と私に気を使っている様だった。

その引越し先は、実は小杉に教えてもらった所である。

大家さんが良い人との事で進めてきたというわけだ。

小杉に感謝、感謝である。

大家さんが良い人かどうかはわからなかった。

ただその奥さんは働き者だった。

毎日すごい量のおかずを作ってくれる。

その下宿にはリクライニングスペースもあって、他の部屋の人とも仲良くなった。

ものすごく大きな変化が私には楽しかった。

彼女とはその変化のせいか仲が良くなっていった。

男性のみの下宿なので彼女は来れなくなったが、デートの雰囲気ですごく良くなった。

彼女は「前と変わったね。」と喜んでくれた。

自分の中で彼女と出会う前、生活の大きなウエイトを占めていた音楽は、フォークギターで流行の曲を歌うようになっていた。しかし自分では曲を作らなくなった。

『彼女との仲が壊れてしまう』と思い込んでしまっていたからだ。でも幸せな生活が続いた。

そんな幸せの最中、親から突然一本の電話が入った。

親から電話なんて大学入ってから初めてだった。
それは親父が病気で倒れたとの事だった。
秋も終わりの季節だった。

それを皮切りに私はふさがちになった。

彼女はそんな私を支えてくれた。

しかし日が経つにつれ一向に暗いままの私を見てあきれられる様になり、それが巡って余計ふさがこんでいった。

そして初めてそのことを大家のおやつさんに話した。

大家さんは小杉が言った通り良い人だった。

次の日、大家さんは私を釣りに誘った。

初めての誘いだった。

『気分転換』との事だった。

あまり釣れなかったが、いろいろな話をして少し頭の整理ができた。

その日、家から電話があった。

親父の容態は一向に良くなってないらしかった。

そしてその電話で母は「家を継いでほしい。」と言ってきた。

私は決心した。

大学をやめて家を継ぐ事に。

次の日、彼女にその事伝えた。

そして『一緒に来てくれないか?』と言った。

彼女は言った。

「音楽を作らなくなったあなたはつまんない。私は大学もあるし。互いの距離を少しおきましょう。」

という事で次の日、家に帰ることになった。

第七話：実家での新しい生活

私の実家は東北でそば屋を営んでいた。

店に着いたときは『休業中』と看板が出ていた。

実家と仕事場は結構離れていて、車で30分ぐらいかかる。

でも家の近くには自然がたくさんで、店は国道沿いの好立地だ。そんな中、自分の仕事が始まった。

そばは昔、親の手伝いをしており、そこそこ打てる。

そして数日後には店を開店させた。

しかし常連客は『味が落ちた』とあまり来なくなった。

客はほとんどが旅行者になった。

私はしばらくまた店を休業する事にした。

そして長年親父と店を切り盛りしていた母親に相談した。

母親は気を使ってたのか「確かに味が落ちてるわね。」とその事を初めて言った。

俺は「何で早くそういう事言ってくれないのさ？」と少し怒った。

何にせよ、行き詰った。

そして入院している親父に話してみる事にした。

親父は「一度自分のそばをもってこい。」と言ってきた。

なのでその日に作って持っていった。

親父はそのそばを、ダシの取り具合や面の硬さなどボロクソ言った。ちよつとシヨックだったが、さすがに親父だなと見直した。

それから一週間ぐらい作っては親父の所に持って行くという日々が続いた。

そして「これなら開店してもいいな。」と親父が言った。

次の日、再開店したのだった。

最開店の日、うつすら初雪が降った。

そして来なくなっていた常連客が久しぶりにたくさん来た。

反応は「うまい！また来るよ。」とほとんどの人が言ってくれた。そしてその評判は評判を呼び、客がたくさん来るようになった。

そんな忙しい日々が続く中、彼女との遠距離恋愛は続いていた。

そして仕事の合間を見てラブソングを一曲作った。

それを彼女に聴かせた。

彼女はそれを聴き終わった後、こう言った。

「何でラブソングなの？もっと伝えたいって事って無いの？」と。私は「せっかく作ったのに。」と電話を切った。

それから電話はしなくなった。

そば作りにも余裕ができて、店でそばを作るかたわら店の奥でメロディーを作るようになった。

歌詞を付けてない曲をだ。

その音を常連客に聴かれ、たまに店で曲を披露するようになった。

そして、歌うそば屋として一部で有名になった。

歌う曲は以前作った自作の曲のラブソングが中心だった。

常連客の人は、最初は『良い曲だね』と聴いていた。

しかし数週間経ち、聴きたいという人がいなくなっていた。

仲の良い人になんてか聞くと『ありきたりすぎる』と言われた。

これにはショックを受けた。

それから一週間ぐらい経った。

親父の病気は大分良くなり、退院して仕事をするようになった。

そして数日後、俺に言った。

「お前、頑張り過ぎだ。少し休まないともたないぞ。」と休養をとるようにと命令した。

確かに仕事は順調だったが、曲作りがうまくいかなくて悩んでいた。それを見透かして、家で休むように言われたのだった。

家では自分の好きな様に過ごせ、自分の好きな物を作って食べる。そして、今まで生きてきた人生を思い返し、そして考える時間ができた。

…楽しい事、それは恋愛だけじゃない。

日々の生活の中でいろいろと歌にして伝えたい事がある事に気が付いた。

その目標ができ、曲作りに没頭するようになった。

第八話：仲間との会話

そして自分で考えた歌詞付きの曲を十数曲ぐらい作ったある日、まったく連絡を取ってなかった小杉に電話をした。

「よ！」と俺。

「お？どした？」と小杉。

「いやさ、なんとなく電話してみた。」

「なんだ、寂しくなっただか？」

そしてしばしの沈黙。

「俺、十数曲作ったんだ。恋愛系以外の曲。」

「ほー。是非とも聴きたいねー。」

「それで、来週そっち戻ろうと思って。」

「なに？親父はもういいのか？それに学校も行かないんだろ？」

「学校は来年度から通学する。俺、もっと音楽の勉強がしたい。」

「ほー。お前変わったね。死んだ魚がよみがえったか。」

「それで一つ頼みたい事があるんだ。大切な事。」

「なになに。聞かせてみ。」

「俺とバンドを組んでほしい。」

「え？でも俺もバンド入っているしな…。」

「掛け持ちで良いからやってくれないか？」

「…そうだな。…でも掛け持ちは嫌だ。今やってるバンドは抜ける。」

お前が作るバンドに入ってやるよ。」

「本当か？」

「ああ。その方が面白そうだしな。」

「悪いな。恩にきるよ。」

「そっいえば彼女はどうした？」

「あ、まったく連絡とってない。」

「お前の彼女、ピアノコンクールで一位取ったらしいぞ。」

「マジか！…！…そうだな。近いうちに電話してみるよ。」

「ああ、そうしなよ。お前がこつち戻ってくるの、楽しみだな。」
「ああ。後悔はさせない。」
と、電話を切った。

彼女と連絡を取るのには時間が経ったせいかなかなか電話できずにいた。

そして数日後、ようやく決心し、電話をかけた。

「もしもし」

「冬真君か。久しぶり（笑）。」

彼女が暗い声でなかったので安心した。

「ピアノコンクールで一位取ったんだって？小杉から聞いたぞ。」

「うん、取ったわよ。そっちは？変わりない？」

「ああ。変わった事といえば恋愛系以外の曲をたくさん作ったぐら이다よ。」

「え？本当？聴きたい！今すぐにでも。」

「聴かせたいけど電話では無理だな。」

「でしようね。あの…明後日そっち行っている？」

「…そっちって…実家？！」

「うん。3日後正月だしね。今、学校も冬休みなんだ。」

「あ、親には千夏の事言っただけだったんだ。でもいいよ。いいきかけだし。」

「曲も聴きたいしね（笑）。」

「わかった。明後日、楽しみにしてるよ。」
と電話を切った。

第九話：大晦日&正月

親にその事を伝え、そして来る当日、私はそわそわしていた。

彼女はバスで来るらしく、バス停に着いたら迎えに行く事になった。

私はというと到着予定時刻の1時間も前から出かける準備をしていた。

そして予定時刻15分前に電話が来てバス停に着いたとの事だった。私は冷静を装い迎えに行った。

「ひさしぶり✓」会った第一声は声がひっくり返ってしまっていた！

「なに（笑）。変な声（笑）。」動揺ばれられた！

私はポリポリと頭を掻きながら「なにその大きな荷物。」と聞いた。千夏の手には四角い大きな荷物があつたからだ。

「私が作ったおせちよ。」

「おー。ありがとうね。」感動だった。

車に乗り、実家までの間、自分の住んでいる町の事など無難な事をしゃべっていたら家に着いた。

家に着くと、家族総出で玄関の前に並んで出迎えられた。

「どうもどうも。」と自己紹介する自分の家族。

その後はまさに祭りだった。

自分の家族は父・母、それにおじいちゃんとおばあちゃんと一緒に住んでいた。

ちなみに俺は一人っ子だ。

着いてすぐ千夏に質問攻めをするおばあちゃん。

俺は千夏に「ごめんな。」と言っておいた。

その日の夜は年越しそばを食べ、2人きりではほとんど喋らず自分の家族と一緒にいた。

次の日の朝は千夏特製のおせちだ。

「実はお母さんに手伝わってもらったんだけどね。」と嬉しそうな千夏。

「いや、おいしい。おいしいよ!」と言うと千夏はまた喜ぶ。それが自分にとって幸せだった。

午後からは自分の地域の神社に初もうでに行った。

さいせん箱の前で500円を入れ願った。

千夏は「何願ったの?」と聞かれたが「内緒。千夏は?」と聞き返す。

「私も内緒。」と言っていた。

私は本当は『千夏と結婚できますように。』と願ったのだが、そんな事口が裂けても言えない。

帰り際のおみくじは大吉だった。

第十話：千夏の決意

家に着くと、両親は仕事、おじいちゃんやおばあちゃんは地域の集まりに出かけ、いなかった。

仕事はそば屋なので大晦日はいつも仕事をする事になっている。

しかし今年は千夏が来るという事で開店以来初めての大晦日は休みだ。

その分正月も返上して働いている。

家の中には私達2人しかない。

私は家族がいないので最近作った曲を千夏に弾き語りで聴かせた。

千夏は目を閉じ、じっと聞いていた。

そして一曲弾き終えた。

その一曲を聴いて千夏はしばらく考えていた。

そして言った。

「…いい。凄く良いよ！」と千夏。

「ほんと？」

「うん。言いたい事が伝わる歌詞だしメロディーも凄く歌詞に調和している。」

「マジか！」

「ラブソングでないのも斬新だし、なんていうか景色の色が伝わってくるような感じだよ。」

「ありがとう！」

俺はそれだけで十分だった。彼女が喜んでくれるだけで。

そしてこう千夏は言った。

「新しくバンドを組もうとしているんだって？小杉君から聞いたわよ。」

「ああ。大学も本気でやろうと思っている。」

「キーボード担当は決まった？」

「いやまだ。バンドメンバーも俺と小杉しか決まってないし。」

「じゃあ私をキーボードに入れてよ。」

「え！？でも千夏はクラシックピアノどうするの？」

「やめる。さっきの一曲で決めたわ。あなたにどこまでもついてくわ！」

「それは嬉しいけど…。よし！俺に付いて来い！」

そうして千夏がキーボードに決定した。

次の日、ひさしぶりに落ち着いた日だ。

千夏は1日でも早くバンド活動したいと言ったが、もう少し実家でのんびりしたかった。

早る千夏は今日の朝、バスで戻っていった。

早く帰る理由は、新曲のキーボードパートを考えたいとの事だった。私の親は『もう少しのんびりしていけばいいしょ』と言ったがいてもたつてもいられないらしかった。

千夏らしいなと思った。

私は千夏に『3日後にそっちに行く』と言ってあった。

その日は実家の犬の散歩やら陽だまりでのんびりしたりした。何気ない一日、それが本当に大切だなと思った一日だった。

次の日、一つの詞を作った。

メロディーは当ててない。

くさいラブソングの詞だった。

第十一話：新たな旅立ち

そして約束の日、音大のあるその町に旅立った。

大学の先生が『また通うかもしれない』と、休学扱いになっていた。そしてその地に着いた。

そこには千夏と小杉がいて「おかえり!」「よう!」とそれぞれ挨拶してくれた。

その日は打ち合わせもかねて飲み屋をはしごした。

色んな話を3人でできてすごく楽しかった。

そしてホテルに泊まって一日が終わった。

次の日、以前下宿していたおやつさんところに行った。

また世話になるつもりでいた。

おやつさんは快く承諾してくれた。

荷物は次の日に来る事になっていたので小杉んちに遊びに行った。

小杉んちは一軒家で親と住んでいた。

初めて行くので、駅で待ち合わせして連れてってもらった。

そして小杉んちに着いた。

小杉んちは凄かった。

なんとバンド用の防音室まであった。

小杉の担当はドラムだ。

でもドラムだけでなくギターも多少弾ける。

さすがに小杉だった。

一家に一台ほしいぐらいだ。

そして小杉のアコギを借り、リズムセクションのチェックなどした。1時間ぐらいして千夏が来た。

そしてその後、2時間ぐらい3人で合わせた。

3人のセッションはさすがというかなんというか息が結構合っていた。

まあ俺がこつちに来る前に2人で打ち合わせや練習していたせいもあるが。

いい感じだった。

そして練習後の3人の会話である。

「いい感じだな。これならあと数回練習すればライブできるよ。」と小杉。

「ああ。後は…ベースとリードギターがほしいんだけどな。」と俺。
「リードギターはともかくベースは今は私がキーボードでカバーしてるけど。」と千夏。

「ま、とりあえず今の感じで行こう。」という考えで落ち着いた。

「そだ。」と千夏。

「ん？」と2人。

「ライブ会場、2週間後、近くの多目的ホールね。」

「えー！？聞いてないよー。」と2人。

「だって言ってるじゃないもん。」と千夏。

そんな千夏のサプライズもあって、その日は盛り上がった。

第十二話：新しいバンドでの初のライブ

そして数回集まって練習したのちのライブの日である。

『行くぞ！』『オー！』

ライブが始まった。

ライブは大成功だった。

音楽的ジャンルはポップロック中心だったが、歌詞が物語っぽく今までにない感じだ。

なのでその新しい感じにライブ会場は沸いた。

そしてアンコールを2回やってライブは終わった。

その控え室。

「すっげー楽しかったよー！」とめずらしく興奮気味の小杉。

「私、感激！」と千夏。

3人でライブの話で盛り上がっていた。

その時である。

『コンコン』とノックの音がした。

「ん？誰だろ。」と言いながら開ける俺。

「ライブお疲れ様。」と俺の知らない人がいた。

「あー！高山先生！来てくれたんだ。」と千夏。

どうやら千夏の知り合いらしい。

「いやー、すごく良かったよ。特に歌詞が今までにない新しさだね。」

「と高山先生という人。」

「ありがとうございます。で、例の件、考えてくれましたか？」

「ああ。いいよ。このバンドに入らせてもらうわ。」

俺はいまいち状況が飲み込めないでいた。

そんな俺を見て千夏が説明した。

「高山先生は私のピアノの先生よ。音楽のセンスが凄くてバンドに入ってもらおうと思って誘ってたの。そしたら『ライブ聴いて決めるわ』って。」

「キーボード2人もいらんぞ。」少しげん気味の俺。

「ああ、高山先生の一番得意な楽器はベースだから。」

「なに！？ベース？」

「それにアレンジもすごく上手だよ。全体の構成とかわからない時、頼りになるよ。」

「千夏がそこまで言うなら良いよ。」

「ホント？嬉しい！」と千夏。

「これからよろしくお願いしますね。」と私は高山先生に言う。

「こちらこそよろしく。私の事、タメだと思って接してちょうだいね。」と先生。

「そんな！いえいえ、先輩ですから。」と俺。
という事で、新メンバーが増えたのだった。

第十三話：初まりの季節

それから数回全体で練習を行った。

ベースが増えたので千夏はベースパートを止め、リードギターパートとコードを弾くようになった。

「本当はリードギターがいればいいんだけどな。」と俺は言った。リードギターパートを合わせて俺がやるという案も出たが、そんなにギターは上手じゃなく、廃案になったという経緯を持つ。

先生はベースがかなりうまく、たった一日でほぼぴったり息を合わせてきた。

しかも全体の構成も考えてくれ、以前のライブよりも一段、いや2段ぐらい良くなった。

その4人でのライブは最初、俺の作詞・作曲以外の曲はやらなかった。

そして5回ぐらいライブをしたが少々マンネリ化してきてしまった。常に変化を求める俺や千夏は次第に飽きてしまった。

そうこうして初めてのライブから1ヶ月ぐらい経った。

そのくらいから千夏が歌詞を書いて来る様になった。

女性らしいその歌詞は最初、抵抗はあったが、先生の力もあって良い曲になった。

俺はその歌詞にメロディーを付ける担当になっていった。

そしてボーカルは千夏がたまに自分の歌詞の歌を歌うようになった。すごく幅が広がった感じがした。

そしてますますそのバンドの人气が上がっていったのだった。

そうこうして忙しい日々が続いた。

春も初まりという季節、俺たちカップルは大きな変化があった。

2人で同棲する様になった事だ。

下宿のおっちゃんも「もうお前なら大丈夫だな。」と言われた。

バンドのおかげで金銭面では問題はない。

2人の仲も安定していて、以前のようなとんがった感じは今は全くない。

すごく仲の良い2人の生活が始まったのだった。

第十四話：Spring Wind

うらかな西日のさす昼下がり、聴いた事のないメロディーとぼんやりとした歌詞の曲が聞こえた。

「う……。ん？いい曲だ。…千夏？」

それは千夏のピアノと口ずさむ歌詞だった。

「あ、起こした？この歌詞良いね。いつ書いたの？」と千夏。

「おはよ。ん？…この歌詞は…。」

「ん？」

「確か…このバンドを作る前、実家からこっちに来る前に書いた詞だ。」

「タイトルは…Spring Wind？いいね。」と千夏。

「良いメロディーだったよ。もう一回聴かせてくれないか？」

「いいわよ。」

それは新緑の息吹がメロディーに吹き込まれたかのようなメロディーだった。

「すごい！この曲は良い！この曲主体にしてバンド活動やろう！」と俺は言っていた。

その曲だけは自分で歌いたく、千夏には悪いけど俺がボーカルをした。

その曲の初披露の発表ライブ。

それは久しぶりの鳥肌物だった。

割れんばかりの拍手。

大成功だった。

「いやー、久しぶりの高揚感だね」と俺。

「いやーまったくだー。」などとライブの感想を言っていた。

『コンコン』と突然戸をノックする音。

「うん？誰だろ。」と開けようとする俺。

『いやー！すっげー良かった！』といきなり誰が入ってきた。

「だれ？」と俺。

「あれ？進君^{すすむ}じゃない。どうしたの？」と先生。

「あ、先生の知り合いか。」と納得する俺。

そしてその進はこう言った。

「俺にリードギターやらせてほしい！」と。

俺は先生を見た。

先生は何も喋らずうなづいた。

俺は言った。

「一度君のライブを見せてほしい。バンドやってるんだろ？実力を
見せてほしい。」とみんなを見る。

何も言わずうなづくみんな。

「ああ、いいぜ！明後日、この会場でやるから絶対来てよ。」とそ
いつ。

そしてチケットを私に渡し、帰っていった。

レベルは先生が言うくらいだからうまいに決まってる。

でもどんな曲をやるのか見てみたかった。

進のライブの日、みんなで来ていた。

どうやらビジュアル系のロックだった。

最初はあまりのメイクに『進どこ？』とか皆で言ってた。

確かにギターのレベルは凄かった。

問題は他のメンバーのうまさと曲だ。

その日のうちに皆で集まり進のメンバー入りが決まった。

第十五話：最終話（エンディング）

次の日から練習を開始した。

最初はどんな風にリードギターを入れるかとか構成をだ。

全体がまとまったのは一週間ぐらい経ってからだ。

そんなある日だ。進が「次のライブが決まった。」と俺に言った。

「どこ？」俺は聞いた。

「テレビ。生で。」と進。

「え？え？！」といきなり言われた事に久しぶりにキョどる。

そんな俺を見てみんな笑っていた。

俺以外みんなは知っていたらしい。

ライブは言われた日から一週間後だった。

テレビ側は『ボーカル以外の音は音源流すよ』との事だった。

俺はそれは絶対嫌だと言った。

もしそうなるのであればTVに出ないとまでの覚悟をしていた。
そしてTV側が折れた。

生放送当日、「緊張するー！」俺は叫んだ。

まだ幕は閉まっている。

みんなその声で少しなごんだみたいだった。

梓はある番組の合間に放送されるみたいだった。

そして幕は開いた。

もちろんやる曲は『Spring Wind』だ。

俺メインボーカルで千夏が上でハモリ。

初のハモリ曲の挑戦だ。

5人でその曲を誰かの前でライブするのは初めてだった。

結果は多少ミスがあった。

だが、ようやくバンドとして完成できたと実感した。
割れんばかりの拍手喝さいだった。

ライブ…といっても1曲だけだが…終わり、インタビューされた。
私は代表して「音楽と出会いに感謝してます。」と締めくくった。
そうして夢のような時間が過ぎていった。

春、それは初まりの季節。

新しい命が芽吹きだす季節。

つながりの夏を過ごし、変化の秋を乗り越え、終わりの冬を辛抱し、
そして始まりの春、私たちは結婚した。

あのテレビのライブから1年経った春。
長く、そして充実した一年だった。

生放送のテレビのライブから一躍有名になり、良くテレビに出る様
になった。

ライブも数をこなし楽しい日々がそこにはあった。

結婚は早くしたかったが、下宿のおやつさんのアドバイスで『少し
時間を置いた方がいい』と言われたからだ。

下宿のおやつさんとはもう下宿はしてないが今でもとても良い相談
相手になっている。

そうして次の年の春、結婚したのだった。

バンドはみんな今でも仲良く、今ではみんなで歌詞を出し合い曲を
作っている。

その活動は突発的で、曲を作りたくない時はまったく曲を作らない
といった感じだ。

たまに集まるまでにメロディーや歌詞をそれぞれ溜めて、集まったときに作りあうといった具合だ。

集まれば飲んで歌って騒ぐ、とてもいい仲間だ。

『出会いが僕達を強くする』そんな事を考えながらこれからも生きていくのだった。

第十五話：最終話（エンディング）（後書き）

今回の作品は初めての恋愛中心の作品でとても難産でした。
完結するまですごく苦しんだんですが、その分みんなが楽しんで
ただける物になっていとおいらは思ってます。

今年の小説の執筆活動はこれで終了にします。

長い間読んでくださった方々、そして新たに読まれた方々、ありが
とうございました。

今後の活躍に期待しててください。

それでは。

P.S.（プレ○ステーション略）

Spring Windは実際自分で作った曲の一つです。

おいらの代表曲です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0700i/>

春風のメロディー

2010年10月10日05時57分発行